

# NPO 入門課題レポート

## テーマ『 架空の NPO 事業計画の作成 』

---

事業内容：本の読み聞かせ

団体名：ほんくらぶ

文教育学部 人間社会科学科 2年 Y.C

### 目次

#### 1. 現状認識・問題意識

- A. 子ども達の本離れ
- B. 読解力の低下
- C. 地域の人間関係の希薄化

#### 2. 団体概要

- ・ビジョン
- ・ミッション
- ・ゴール

- ①学校で子ども達対象の地域の有志・ボランティアの本の読み聞かせ
- ②本の勉強会
- ③地域の人を呼んで行う子ども達の紙芝居等指導

- ・予想される成果（1の現状認識と比較して）

- a. 子どもの読書量の増加
- b. 子どもの能力の発達
- c. 地域の交流の活発化

- ・予想される顧客

#### 3. ビジョンの再認識

- ア. 評価方法
- イ. 懸案事項
- ウ. 予算・時期・規模などに関して

※事業計画の骨子

今回、仮想事業計画案として、地域の有志や大学生による「小学校での本の読みかせ」を行う NPO『ほんくらぶ』を提案する。いま子ども達の活字離れが進み、読解力の低下をもたらしている。教師たちは以前よりも多忙になってそこに割く時間がない。地域の人間関係の希薄も深刻だ。そこで地域の人々による本の読みかせによって、地域の人々との交流が生まれ、子ども達が本に親しむことは出来ないかと考えた。以下、事業計画を詳細に見ていきたい。

—本の読み聞かせとは—

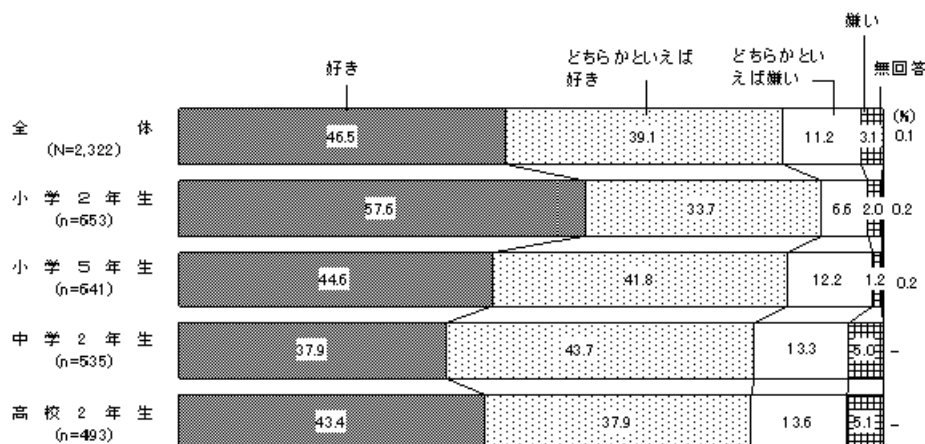
子どもが聞き手となって話し手と一緒に本を読む。様々な形態があり、決まった方法はない。子どもの読書への導入として用いられる。効用としては、物語に触れることで感性が養われ、読んでくれた人と交流ができたりなどが挙げられる。

## 1. 現状認識・問題意識

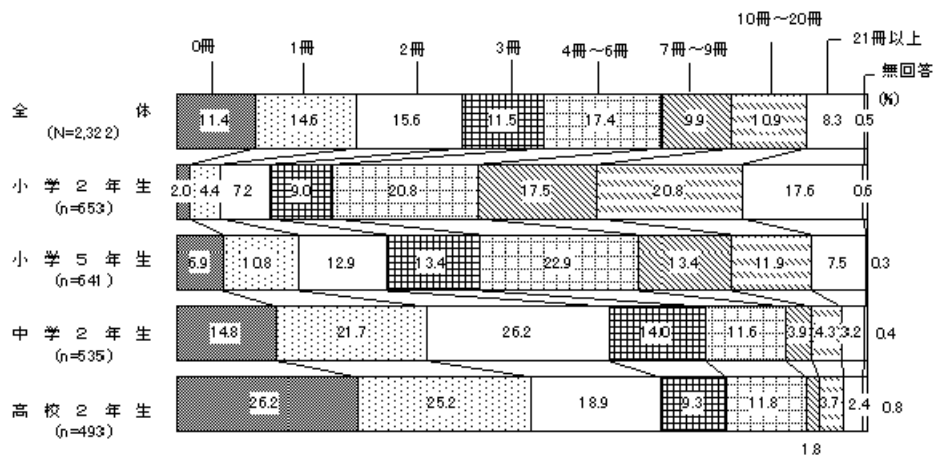
### A. 子ども達の本離れ

近年子ども達の本離れが進んでいる。日ごろの読書の状況に関する文部科学省の平成 16 年度の調査によると、「好き (46.5 パーセント)」、「どちらかという好き (39.1 パーセント)」という回答は全体の 8 割以上 (85.6 パーセント) である。子ども達は総じて好んで本を読むようだ。しかし、1 か月に読んだ本の数は、「4 冊～6 冊 (17.4 パーセント)」が最も多く、次いで「2 冊 (15.6 パーセント)」、「1 冊 (14.6 パーセント)」などとなっている。学年別にみると、学年があがるにつれて、本を一冊も読まない割合が高くなっている。小学校のころは本が好きでよく読んでいたのに、高校生になると読む量がとたんに減ってしまう状況にある。

図表 3-1-5 本を読むことについて (全体、学年別)



図表 3-1-11 一か月に読んだ本の数（全体、学年別）



文部科学省調べ「親と子の読書活動等に関する調査一日ごろの読書の状況一」

## B. 子どもの読解力の低下

平成 16 年度 OECD の高一を対象とした PISA 調査<sup>1</sup>（生徒の学習到達度調査）によると、数学リテラシー、科学的リテラシーなどは一位の国とは統計上の差はなかったものの、「読解力」の得点は OECD の平均程度まで低下していることがわかった。

	読解力	得点	数学的 リテラシー	得点	科学的 リテラシー	得点	問題解決 等力	得点
1 位	フィン ランド	543	香港	550	フィン ランド	548	韓国	550
日本	<b>14 位</b>	<b>498</b>	6 位	534	2 位	548	4 位	547

（文部科学省 HP より PISA2003 における平均得点の国際比較）

このように読解力は他の項目と比べ低下傾向があることがうかがえる。1 の「本離れ」からわかるように学校で適切に読書活動が行われていない、子どもたちが興味をなくしているが原因となって読解力が芳しくない状況を引き起こしていると考えられる。

<sup>1</sup> OECD の教育指標事業の一環として行われる「学習到達度調査」。国際的に比較可能な調査を定期的に行うことにより、生徒の学習到達度に関する政策立案に役立つ指標を開発することを目的としている。（文部科学省 HP より）

#### C. 地域の人間関係の希薄化

近年、地域の人々の交流が少ないと言われている。近所には誰が住んでいて、どんなことをしているのかもしれないという状況がある。子ども達は同世代または、何十歳も年の離れた教師との関わりしかない。しかし学校というのは、小・中・高どれをとっても地域の協力・理解がないと運営は成り立たない。逆に言えば、学校は地域の交流の場としても成り立つということだ。地域に根ざした学校体制を作ることによって、多くの人にとって開かれた学校、また、子ども達にも多様な人間とのふれあいという利点が挙げられる。

また、実際図書の読み聞かせやブックトーク<sup>2</sup>を行っているのは、

小学校・・・74.1 パーセント
中学校・・・21.3 パーセント
高等学校・・・8.5 パーセント

と高学年になるほど少なく、本の読む量に比例している。

以上、A 子どもの本離れ、B 読解力の低下、C 地域の人間関係の希薄化という 3 点の現状を考察した。これらの問題を解決するために、地域の有志、大学生ボランティアによる本の読み聞かせを行う『ほんくらぶ』を考えていきたい。

#### ※読み聞かせは教師がすれはいい？

教師の実態は多忙を極めている。岩手県の調べによると、平日 3 割近い教員時間外に 2 時間以上仕事に従事し、7 割が家に持ち帰っている。また、5 割近い教員が土日も仕事をしている。県立学校と小・中学校教員の 98 パーセントが多忙だと感じている。

このような状況下では、よりよい読み聞かせ活動を教師がすることは難しい。それならば、それに精通した人々が無理なく行ったほうが一層の効果が上げられるだろう。

(平成 19 年度 3 月 岩手県小中学校の多忙化問題に関する検討委員会資料り)

<sup>2</sup>ある一つのテーマに沿ってトークで繋ぎながら何冊かの本を順番に紹介することで、読書案内の方法のひとつ。

### 2. 団体の概要

- ・団体名：ほんくらぶ
- ・ビジョン：本を楽しみ、親しむことによって子ども達が健やかに成長する
- ・ミッション：地域の有志・大学生による小中高校における本の読み聞かせ、ブックトーク

- ・ゴール

#### ① 学校で子ども達対象の地域の有志・ボランティアの本の読み聞かせ

これは本団体の主となる活動である。地域の有志を募り、実際の学校で読み聞かせ活動を行う。募集対象としているのは子育てで読み聞かせを経験がある方や、近隣の大学に通っていて子ども達と触れ合いたい人など条件は問わない。唯一問うのは、子ども達と責任を持って接してほしいということだ。選ぶ本は個人の自由だ。子ども達に合っており、自分ができるものを選ぶ。学校に着いたら、子ども達を前にして読み聞かせを行う。読み終わったら報告書を書き、コピーを学校に提出し、原本は団体保管用に持ち帰る。

#### ②本の勉強会

①の活動を円滑に進めるためにも、勉強会・反省会を行うことが重要である。普段の活動ではなかなか自分の読み聞かせを他人から評価されることは少ない。（子ども達の反応は別にして。）そのため、マンネリ化したり、テーマが似てしまったりする恐れがある。そのために、ボランティア同士で自分達の読み聞かせを研究する。本の選び方、声の出し方、子どもへの問いかけ等ベテランから若い方まで意見を出し合う。また、自分ではなかなか見つけられない本などの情報も交換できるこのようにして、質の高い読み聞かせを維持でき、さらに高みをのぞむことができる。

#### ③地域の人を呼んで行う子ども達の紙芝居等指導

読み聞かせはただ聞いているだけではない。指導者が適宜発問したり、話の続きを作ったりと自由度の高いものだ。そこで、ミッションの「本を楽しみ、親しむことによって子ども達が健やかに成長する」ために、子ども達が自分達で表現することも大切だと考える。その場合、テーマの選び方、声の出し方などノウハウを蓄積している当団体は、子ども達によいものを提供できる。子ども達が自分達で読み聞かせ、紙芝居、演劇をする際に指導員としてサポートする。

#### ・ 予想される成果

ここでは、1. 現状認識・問題意識がどう解決されるかを当てはめながら述べていきたいと思う。また、この事業を継続することによってさらなる効果があることも取り上げる。

#### a. 子どもの読書量の増加

読み聞かせの効用の主要なものとして、子ども達が読書に興味を持つということがある。「A 子どもの本離れ」にあるように学年が上がると、読書量も落ち、興味も低下することがわかっている。読み聞かせは小学生のときは読書への導入として、中学校・高校ではその興味を継続するという意味がある。よって、活動を続けることによって「読書量の増加」が見込めるだろう。

#### b. 子どもの能力の発達

読書量が増加することによってどのようなことを子ども達は会得するだろうか。PISA の学習到達度調査からみるように「読解力」は思考力、判断力、表現力が求められる。読み聞かせによって以上の能力が向上すると考えられる。イメージしながらお話を聞くことによる想像力の発達。また、静かに相手の話を聞くという姿勢。普段触れ合わない人たちとの交流によるコミュニケーション能力の向上。本を読んだことをみんなで話し合う際の表現力・思考力向上。など挙げればきりが無いのだが、これらのことは年齢を問わず子ども達にとって必要なことである。

#### c. 地域の交流の活発化

当団体の読み聞かせをする担い手は地域の有志（子育て経験のある方、子どもと触れ合いたい方）、近隣の大学生である。これらの人たちは普段学校に出向く機会も少なく、また、地域の間関係の希薄化によって接することもあまりない。しかし、活動を行うにつれて、このような人たちが近くに住んでいるんだという意識が子ども達に生まれるだろう。また、友達・先生とは違った関係ができる。いろんな年齢、種類の人が学校を中心として交流をすることによって地域までもが活性化すると考えられる。

#### ・予想される顧客

##### ○第1の顧客：小・中・高校生の児童生徒

児童生徒にとって効果のあることは、前にも述べたように、大きく「いろいろな人との交流」「読書量の増加による、様々な発達（想像力、コミュニケーション能力、聞く姿勢）」がある。そのためには、毎回の読み聞かせを充実させるものとし、児童生徒の満足度を上げることも大切だ。

##### ○第2の顧客：地域住民

地域住民にとって効果のあることは、子どもが健やかに育ち、地域の関係性が高まることである。そのためには質の高い活動を継続していくことが大切であると考えている。そして、多くの人に活動に参画してもらうことも視野に入れていきたい。

### 3. ビジョンの再認識

#### ア. 評価方法

個人の評価としては、学期に一回程度学校側（教師・生徒を含む）から活動のフィードバックをもらう。子ども達の反応はどうであるか、本の選別は適当かなどの意見をもらう。また、スタッフ同士の勉強会による個人の活動の振り返りも行う。

団体の評価は、半期に一度総会を開き、事業の方向性を見直し、各顧客の満足度の如何を話し合う機会を設ける。ここには、スタッフや協力者（金銭面を含む）、学校関係者などが参加する。

#### イ. 懸案事項

##### ○スタッフの獲得

→地域の有志と、大学生のリクルーティング方法があいまい。チラシを考えているが、HP 立ち上げ等になると費用がかさむので、はじめは地道に人づてなどから広げていきたいと考えている。

##### ○学校との交渉

→学校に放課後や朝の時間に読み聞かせを行わせてほしいと交渉をする仕方があいまいである。こちらの思い、この活動を行うことによって子ども達、また学校側にどのようなメリットがあるのかを伝えることが必要である。

##### ○資金の獲得

→ビジョンに賛同し、参画してくれる人からどのように資金を得るか。これは活動を理解していただける人から協賛金を募ることが考える。そのためには広報活動が必要になってくる。またそれだけではなく、徐々に自分達の活動



## NPO 入門課題レポート

### テーマ『 架空の NPO 事業計画の作成 』

---

の強みを生かして、他団体へのレクチャーによる資金も獲得していけたらと考えている。

#### ウ. 予算・時期・規模などに関して

##### <規模>

区内小中高等学校で活動。はじめは数校で開始するが、だんだんと規模を広げる予定。

スタッフは、地域の有志5名、大学生5名ほどを想定している。これらもリクルーティングをしていくので増える予定。

##### <予算>

本・・・スタッフがすでに持っているもの。また、参画してくれる人からの寄付。学校にある本などでまかなうため費用はかからない。

場所・・・読み聞かせを行うのは学校なので、こちらも費用はかからない。スタッフの交通費は地域の方なので、往復のバス200円×2回（往復）×人数分×回数分が必要。また、総会や勉強会で地域の公民館を使用するので、1200円×12ヶ月（月1回勉強会）、2000円×2回（半期1回総会）も必要となる。

広告・・・大学や地域の公民館においてもらうポスター、チラシ代。カラーであれば50円×300枚必要となる。

##### <時期>

学校側との交渉がうまくいったらすぐに始められる。基本的には学期ごとに細かいところを見直しながら1年間契約を行う。

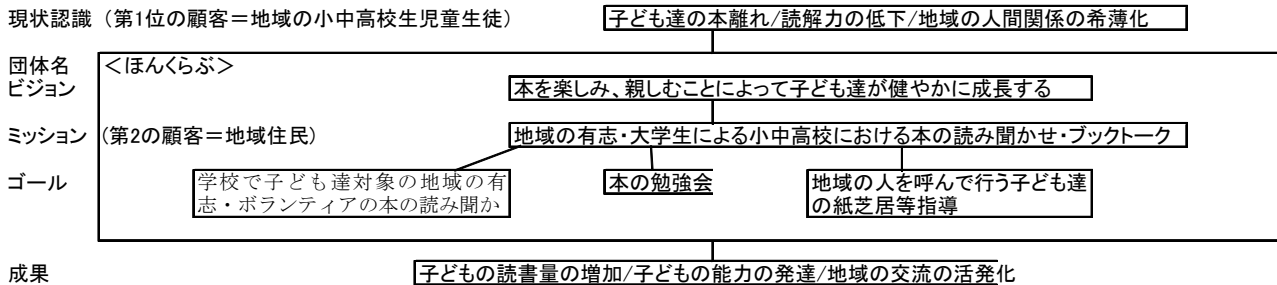


# NPO 入門課題レポート

## テーマ『 架空の NPO 事業計画の作成 』

### < 事業計画の骨子 >

#### 事業計画の骨子



#### ※参考文献

文部科学省 HP

- ・親と子の読書活動等に関する調査一日ごろの読書の状況一
- ・PISA2003 における平均得点の国際比較

平成 19 年度 3 月 岩手県小中学校の多忙化問題に関する検討委員会資料

### 終りに (感想)

本の読み聞かせは幼い頃自分が親にしてもらい、そこからいろいろな本を読むようになったことから思いついた。読解力低下が叫ばれている中、教師たちの負担は増えるばかりだ。しかしとても重要な問題であると感じる。この隙間を埋める事業こそ NPO の出番なのではないかと考えた。地域のおばさん、おじさん、お姉さん、お兄さんが学校に来てお話ししてくれる、そう考えただけでわくわくする。

しかし、事業として成り立たせるためには資金工面や人材獲得などさまざまな課題があることもわかった。これをどうクリアしていくかを考えるのもまた楽しかった。そこはインターンシップでお世話になっている「えこお」の活動を参考にしながら考えた。